

# 工芸 愛海詩

えみし

ゆげがま  
遊戯窯 (石川県珠洲市)

たかし  
篠原敬作陶展

8月31日～9月12日

特別号 No.25

工芸・愛海詩の会  
会報

平成22年8月25日発行

編集発行人/工芸ギャラリー  
佐藤睦子

〒064-0821

札幌市中央区北1条西28丁目2番17号

TEL・FAX/(011)613-1112

WEBSITE

http://www.emishi-s.com

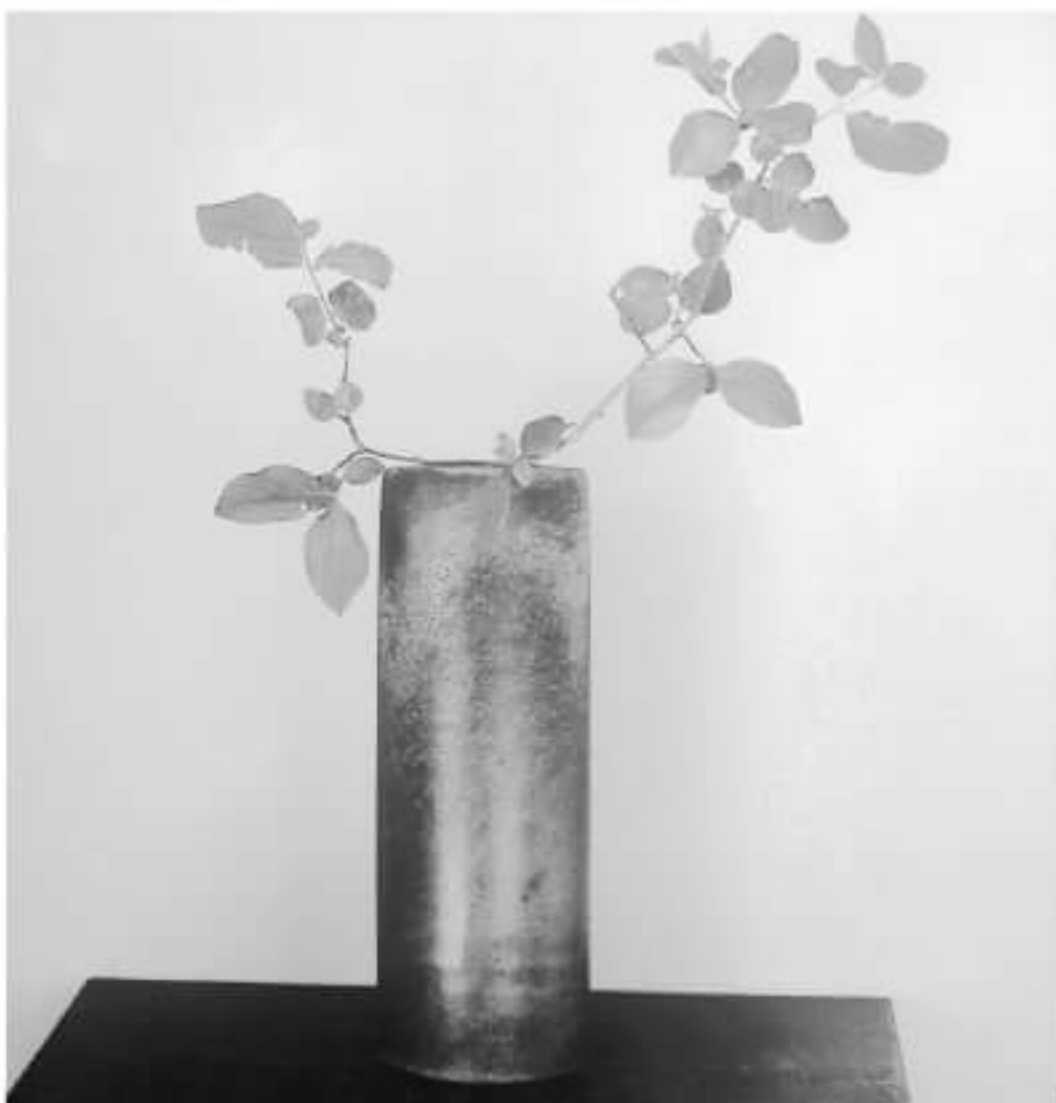
E-mail:kougei@emishi-s.com



創作中の篠原敬

「はだかの王様」という童話は誰でも知っているだろうけど、「裸の王様は裸です」とあなたなら言えるだろうか。「王様であっても裸は裸です」そう言える前提として、思いやりや敬う心の働きは必要だが、心の奥の裏に真実をしっかりと持っている、どうも変だと思える力を一人一人が持っている、そして時と場合が語ることを要すれば、きちんと語る。そのことこそより、必要なのだ。本当のことを考える、語る。本当のことが見える、そう思ったことが、その土地の文化をしつかりとした流行に流されないものに押し上げて行く。本来、文化と流行はベクトルの方向が違う。人はこう言う、あの有名な人はこう考えている、ではなく、「自身はどうなのよ……」ということなのだ。自分が玉だと思っていた人が実は瓦礫だったりすることがある。そんな時、いい知れぬ寂寥感を味わう。砂をかむような思いにもなる。その感傷は自分が担うべき何ものでもなく、なんとも情けなくなる。そんな時、「まだまだ豊かな学びと遊びがたりないなあ」と思ったりする。裸の王様に、エセのすばらしい人、あの人は裸ですよ、あの人はでたらめですよ……といぬく目と心を養うこと、自分を大切に養えるのは自分しかいないことを大人になった私達は知っている。目線の確かさは豊かな自然、人との語り、音楽、読書、おいしい食事、体と心で接して培うものだ。それが自分を大切にすることなのだ。贅沢をする、甘やかしたり、利己的になるといふことではなく、オンラインワンの自分こそを大切に信じて、養ってほしいと思う。そして、胸のふるわせるような出会いを沢山していたきたい。豊かな学びと遊びから、美と文化を見つめてほしい。みなさんお一人一人が文化そのものだから、まずはご自身を大切に……大事に……。そうすれば本当は何かの見えるてくる。

☆お知らせ 来たる10月19日(火)、13時30分から織物美術家の龍村光峯氏(綿織りで著名な龍村の三代目)の講演会を致します。お話しをお聞きになりたい方は席に限りがございますので、早めに工芸ギャラリー愛海詩まで、お問い合わせ、予約をさせていただきます。光峯氏は今、世界をたびたびご活躍され、お人柄もすばらしい織物美術家です。是非この機会にお話しをお聞き下さい。



自然釉四方花器 約・巾14cm×高さ43cm

なんとツヤっぴい黒だろう。この黒をまとう花や枝はよりいっそう存在感が増す。自然釉の確かさがその艶を醸し出す。漆黒の器の沈黙ゆえの雄弁さを感じる。



自然釉ボトル花入 約・巾9cm×高さ30cm

炎の巻き、自然釉の流れが楽しい。お気に入りのワインやお酒を入れて飲んでも味わい深いに違いない。もちろん花入れでも良いが、使う側の感性を楽しませてくれる作品。



自然釉大徳利花入 約・巾12cm×高さ23cm

やわらかなフォルムが心地良く、野の花を一輪入れただけでもその場がポッと明るく清らかな空気が流れるような空間となる。側において愛でたい作品である。

●Profile●

- 1960年 石川県珠洲市生まれ
- 1989年 土と出会う
- 1995年 遊戯窯窯窯
- 2001年 10th ANNUAL GEIJUTSU SAI (Portland, Oregon, USA) 招待出展
- 2004年 ニューヨーク州ブルームビルにて穴窯窯窯
- 2005年 陶土によるオブジェ 「無題」制作(京都・東本願寺)
- 2006年 NHKBS2番組「器夢工房」出演
- 2007年 陶土によるインスタレーション 「無題」制作(京都・東本願寺)
- ホテルベニンシュラ東京に大壺収蔵
- 2010年 「石川の伝統産業～今に生きる匠の技、未来への躍動～」収録 「現代日本の陶芸家」(洋泉社)掲載

☆ 篠原敬 ガラリー滞在日

篠原は個展での出合いを大切に思い、遠く能登半島、珠洲市よりギャラリー愛海詩に来ることを楽しみにしています。9月10日(金)、11日(土)、12日(日)の3日間、この機会に陶芸家篠原敬の今と出合い、交流も楽しんでいただけたら幸いです。詳しい時間をお知りになりたい方は工芸ギャラリー愛海詩までお問い合わせ下さい。



片口注器 巾13cm×高さ10cm

やわらかい曲線が心とむ作品、いろいろなバリエーション、シチュエーションが浮かぶ楽しい器である。手にした時の感触も楽しみたい。長く使って飽きない育つ器といえる。

連載エッセイ・38

福井野 マーチ

作曲家 木村雅信

西区福井は、山あり川あり、その遊歩道あり。三十年前、四丁目の家の庭には、アマガエルが啼き、キジ啼いていた。今は六丁目のバス停から中央公園を抜けて出れば家である。昔から木立を通ってというのが理想だったから、最後の家に違いない。私の窓からは、花も新緑も紅葉も雪の原もある。小鳥はもろろんリスやたまにはキツネも見る。

自然に恵まれたところで子どもが良い方向に育つかといえはそうとは限らない。今の子どもはまっすぐゲームという反自然にとりつかれている。それはケータイやネットなど、要するにマナーが低落しているのだ。プラタナスとシラカバは、子どもたちに皮をはがされて痛々しい。サクラは花をつけると、小さな子どもがさっそく低い枝を折る。その母親が何もしない。大きくなると思える。私は近くの丘の樹木が放火されたのを二度見ている。一度は家のシバ犬のサンチョが吠えて教えてくれた。

公園の木の本は焼けて焦げている。花火の残骸を始末しない。公衆トイレの明かりが壊れる。あずまの屋根の銅板が盗まれる。水道の蛇口が盗まれる。これは大人かもしれない。近年は、朝早く家の前で若者が、パソコンを使いながら車のプレートを付け替えていた。「ナナカマド」と札が付いていた。さぞ頭のよい子が育つだろうと思ったが、例の台風で札は飛んでいった。ある日の朝、職員が、咲き衰えたチューリップを歩きながらカッターで斬首していた。開校十周年の時に、私が作詞作曲した「福井野マーチ」は、歌わなくなると、小学生が言っていた。参院選の投票で体育館に行くと、掲げられていた歌詞が校歌に替わっているのを見た。歌も死ぬのだ。要するに優しさが無い。

篠原敬、工芸ギャラリー愛海詩で5回目の作陶展である。壺、花入れ、器類、香炉、水滴など約40点を展示する。篠原の窯名は遊戯窯、自然体で囚われない篠原の生きざまを作品が捉えて、篠原にぴったりの窯名だ。作品が篠原の今の立ち位置を伝えてくれる。しっかりと、こっくりした黒の陶、薪の炎にかいくぐられ、後半は1100°～1200°の温度で長くひき、焼成する。一連の作品は加飾がなく、自然釉の確かな衣を纏ってそこに静かにたたずむかのよう。そのフォルム、線は李朝、高麗青磁のラインに近いものがある。1人の陶芸家に10年もつき合えば、長い時空の中で、成長、停滞、深みを目のあたりにする。篠原は、正直で確かな、心根の美しい陶芸家の方々にご高覧いただければ幸いです。

ご挨拶  
作品展によせて

「例えば人と人、あるいは人と自然、または人ともの、それらの間にある目に見えないかわりの中から自然に湧き出づる和らかな輪郭のようなもの。かたちづくる(デザインする)とは、その輪郭のようなものを具体的な線で表すというより、むしろ抽象的な残像としてかたちに内包させることなのだ。冬から春へ移ろう時の中で確かに感じた。私にとって大きな悟りであり喜びである。肩の張りがとれ、穏やかに五十を迎えた。能登の深山が色づく十一月初旬から土と寄り添い、長い冬を経て、葉桜が風にそよぐ四月末、心地よい脱力感と微かな未練を残して、こころは土から離れる。後の季節は拙作とともに各地を巡る。数年前からそんなふうな一年の過ごし方が定まってきた。冒頭の駄文は春に作陶の日々を追憶し、その心境を綴ったものである。かたちづくること私にとっての(心的活動)であるなら、拙作を衆目に晒すこともまた行である。もちろんどちらも業(なりわい)であるという現実を拭い取ることはできないのだが、何れにせよ今の私には土はこころの安定剤となり、展はこころの刺激剤となっている。

さて近況と私論はさておき、この秋のはじめに工芸愛海詩にて五度目となる展のお誘いをいただいた。それは私のこころからだ。また札幌の地へと向かわせる嬉しき機縁でもある。毎回、オーナー佐藤睦子さまからは温かいお叱りを、わが師である札幌大谷大学教授木村雅信先生からは確かなご指示をいただく。また手作りの果実酒で迎えてくださる三輪さま、世俗に惑わず飄々としたお姿が印象的な高橋さま、忘れず励ましをいただく大学時代の先輩広瀬さま、おいしい自家焙煎豆を届けてくださる徳光さま、などなど愛海詩でお目にかかったお顔が次々と浮かぶ。展をおして何よりたくさん得難いご縁をいただいた。みなさまとの再会と新たな出遇いに思いを馳せるとき、また胸躍る。まだまだ未熟者の私ですが、よろしくお導きください。

(遊戯窯・篠原敬)